

言語を通して見る異文化 ーフランス語と日本語ー

成戸 浩嗣

(愛知学泉大学コミュニティ政策学部)

0. はじめに

言語の表現形式には、その言語を使用して生活している民族集団のコトガラ(事象、現象、心象)に対する認識の仕方が反映されていることが多い。いうまでもなく、言語はその背景にある社会の価値体系と不可分の関係にあり、社会の価値体系は、それぞれの社会が築かれてきた歴史や自然環境などと不可分の関係にある¹⁾。

日本語話者と他言語話者との間にはさまざまな生活習慣や慣習の相違、個人や組織の行動原理の相違が存在するため、交流に際しては、互いに相手を理解・受容しながらコミュニケーションを行なう姿勢が求められる²⁾。他言語話者が有するものの見方・考え方が日本語話者のそれとどのように異なるかを知っていれば、よりスムーズなコミュニケーションが可能となる。

本稿では、フランス語話者のものの見方・考え方を、初級・中級段階で学習するフランス語のいくつかの語彙・文法現象を通してみていく。日本語話者にとって、フランス語が学習に多くの困難をともなう言語であることは否定できない。語単独の場合と連続した場合とでは発音が異なるのに加え、語形変化をはじめとする様々な文法規則があるため、授業では言語そのものの習得や練習に多くの時間が割かれるのはやむをえない。しかし、日本語話者がフランス語を正しく理解するためには、フランス語話者のものの見方・考え方、コトガラのとらえ方が日本語話者とどのような点で異なるかを知りつつ学習を進めることが重要であり、その度合いは学

習者がフランス語でコミュニケーションを行なうようになるにしたがって高まっていくと考えられる。本稿は、異文化理解を目的とした教育に対して言語的側面からアプローチを試みるとともに、日仏対照研究および日本語話者に対するフランス語教育への新たなテーマを提示することを目的とする。

1. 語義の相違にみる異文化

名詞の中には、客観世界のとらえ方における日仏両言語話者の相違が比較的とらえやすく、学習者の興味をひくものが多い。例えば、泉1989: 12-15 には、日本語の「エビ」、「マメ」に対応するフランス語の単語が存在しないという事例や、家畜を表わす名詞の日仏両言語間の相違が挙げられている。日本語で「エビ」と呼ばれるものに対しては、フランス語では“crevette(小エビ)”、“gambas(車エビ程度のもの)”、“langouste(イセエビに近いもの)”、“écrevisse(はさみの大きなザリガニ)”、“homard(ザリガニの大きなもの)”のようにそれぞれ個別に語が与えられている。「エビ」に対応する名詞がない反面、「カニ」までを含むいわゆる類集合詞として“crustacés(食用としてのエビ・カニ)”が存在する。これらに貝類を加えたものは“fruit de mer(海の幸)”とよばれ、魚類は含まれない。また、「マメ」を表わす名詞としては、“fève(ソラマメ)”、“haricot(インゲンマメ)”、“petit pois(エンドウマメ)”、“cacahouète(南京マメ)”、“soja(大豆)”など

がある。さらに、篠沢・マレ 2003 : 142-143 には、「ウシ」を表わす語として“bœuf(去勢された雄牛)”、“taureau(去勢されていない雄牛)”、“vache(雌牛)”、“veau(子牛)”、“génisse(若い雌牛)”、“taurillon(若い雄牛)”などが挙げられている³⁾。「エビ」、「ママ」、「ウシ」を表わす語はいずれも食に関わるものであり、食材や料理の名前にしばしば登場するため⁴⁾、フランス語圏に滞在する外国人にとっては不可欠の知識であるということができよう。「エビ」、「ママ」、「ウシ」の場合とは反対に、日本語の語彙に細かな区別がみられる例としては、“riz”が挙げられる。泉 1978 : 233 によれば、日本語では「イネ」、「コメ」、「ゴハン」のように区別して呼ばれるものは、フランス語ではいずれも“riz”と呼ばれる。調理法において日本と異なる⁵⁾という実生活における相違もさることながら、フランスの食生活では“riz”は主食ではなく、かつ“légume(野菜)”に分類されている点は知っておく必要があろう。篠沢・マレ 2003 : 186-189 には、パンやコメに主食の働きはなく、食事の中心は肉(または魚)と野菜であり、“riz”は“pâte(めん類)”とともに“légume(野菜)”に分類されるという記述がみられる。厳密には野菜ではないこの両者を“légume(野菜)”としてあつかうのは、食事の中で野菜料理に使われるためである。フランス語テキストの中には、料理の各品がコースのどの位置を占めるものであるかをたずねる設問がみられるケースもあり⁶⁾、学習者が“légume=野菜”として覚えるのではなく、周辺情報とともに理解するための配慮がなされている。

ところで、名詞は動詞や形容詞に比べ、社会情勢の変化がより反映されやすいものであると思われる。周知のように、フランス語名詞には“étudiant/étudiante”のように男性形と女性

形をそなえたものが存在する。藤田・清藤 2002 : 27 には、伝統的にもっぱら男性だけが占めていた職業(professeur「先生」など)を表わす名詞は男性形のみ存在していたものの、女性の社会進出にともなって女性形の名詞も認めようとする動きがあり、「弁護士」は女性にも“avocat”を使っていたが最近では女性形の“avocate”がよく使われるようである、という記述がみられる。男性形のみ存在する職業名詞としてはさらに、「医者」を意味する“médecin”が挙げられる。また、作家を意味する“écrivain,e”は、『プログレッシブ和仏辞典(“écrivain,e”の項)』に、“écrivaine”という女性形が存在する一方で、女性にも男性形が用いられる場合がある旨の記述がみられる。言語は社会における様々な変化の影響を受けるが、職業を表わす名詞における女性形の出現は、最も明確な形でその変化が認められるケースの一つであろう。いかなる職業を表わす名詞に女性形が存在せず、あるいはかつては男性形のみ存在していたものに女性形が出現したかということからは、いうまでもなく特定の職業領域への女性の進出状況が見いだされる。

学習者は限られた時間の範囲内で語を覚えていくことを余儀なくされるため、教える側にとっても上記のような事例をどこまで紹介するかという点では慎重さが求められよう。しかし、フランス語の語彙を正しく理解することと、フランス語話者のものの見方を理解することは表裏一体であり、フランス語を正しく運用する能力を養う上で不可欠である。このことを端的に示すのが、“chaise(椅子)”と“fauteuil(ひじ掛け椅子)”の相違である。周知のように、両者はひじ掛けの有無によって区別されており、“chaise”にすわる動作は“s’asseoir **sur** une chaise”のように「の上(ウエ)／の表面」を含

意する“sur”を、“fauteuil”にすわる動作は“s’asseoir **dans** un fauteuil”のように「の中(ナカ)」を含意する“dans”を用いて表わされる。このことは、フランス語では「ひじ掛けなしの椅子」と「ひじ掛け椅子」を区別するという語彙レベルの問題にとどまらず、“s’asseoir (すわる)”という動作・行為との関わり方において両者が異なるとらえ方をされていることをも意味する。これに対し日本語においては、ひじ掛けの有無にかかわらず「椅子にすわる」によって表わされる⁷⁾。

以上のような具象物を表わす名詞にみられる両言語間の相違についてふれることは、フランス語学習者が興味をもちやすく、かつ理解しやすいのに加え、いわゆる抽象名詞や形容詞・動詞などについても同様の現象が存在することを意識しながら学習を行なうことをうながす効果を生む。例えば、形容詞“chaud(e)”に対して「暑い」、「熱い」が対応することや、“froid(e)”に対して「寒い」、「冷たい」が対応すること、さらには“frais/fraîche”が「冷たい」、「涼しい」のいずれにも対応するのに対し、“doux/douce”が「温暖な」、「甘い」に対応することからは、温度の高低を表わす単語の基本的意味および周辺の意味が、対応する日本語の単語とどのように異なるかがみてとれる。また、「思う」、「考える」に対応する“croire(思うこと、信じることを述べる場合に用いる)”、“penser(考えを述べる場合に用いる)”、“trouver(印象や感想を述べる場合に用いる)”や、「知る」、「わかる」に対応する“comprendre(「理解する」という意味でのわかる)”、“savoir(「知っている」という意味でのわかる)”、「知る」に対応する“connaître(見たり聞いたりして「知っている」)”などの心理動詞は、口頭でのコミュニケーションにおいて繰り返し用いられるものであ

り、早い段階からの習熟が必要と思われる。このようないわゆる類義語の使い分けに対して注意を向ける姿勢を養うことにより、「～できる(可能)」に対応する“pouvoir+不定詞”、“savoir+不定詞”、“Il est possible de+不定詞”、“arriver à+不定詞”や、「～しなければならない」に対応する“Il faut+不定詞”、“devoir+不定詞”、“avoir besoin de+不定詞”などの類義表現についても、その使い分けを意識しながら学ぶようになる。

2. “vous” と “tu”

いわゆる「人称代名詞」は、フランス語学習の初期段階で登場するものの一つである。人称代名詞に続く述語動詞の活用形を覚えるのもさることながら、二人称の“vous”と“tu”の区別は学習者が理解しづらいものである。泉1989:130に述べられているように、“tu”が「君」に、“vous”が「あなた」に対応するとは限らない。同:130-135には、“vous”、“tu”の使い分けについて、両者はももとは社会的な力関係によって区別され、上位の者に対しては“vous”が、下位の者に対しては“tu”が使用されていたが、後には親疎の度合いによる区別、すなわちそれほど親しくなく、あらたまった関係にある者に対しては“vous”が、親しい間柄にある者に対しては“tu”が使用されるように変化した旨の記述がみられる。このような“vous”、“tu”の使い分けを反映しているためと思われるが、初級・中級レベルのテキスト、会話書の表現例には、“vous”を用いた表現に対しては「デス/マス」体の、“tu”を用いた表現に対しては「デュアル/ダ」体の日本語表現を対応させているケースが少なくない⁸⁾。しかしこのような例をいつも目にしていると、学習者が“vous”を用いた表現は日本語のデス/マス体の表現に、“tu”

を用いた表現は日本語のデアル／ダ体の表現に対応する」と誤解してしまう恐れがある。泉1989:131がいうように、“vous”、“tu”の使い分けには現在でも社会的な力関係が反映されるケースがある一方、それとは異なる基準によるケースも存在する。以下の表現例にみられるように、職場などで上司や先輩に対して“tu”が使われる場合がそれにあたるが、このような“tu”の用法は、日本語話者にとって理解することはできても感覚的に受け入れにくく、とりわけ初学者にとっては使用がためらわれることも多いのではないか。

(1) Benoit : À propos, on **se tutoie**? Tu es de la maison maintenant !

Laurent : Oui, bien sûr. (REFLETS 1 : 31)

(2) M. Fernandez : Super. Alors, on se voit demain, et ici on **se tutoie**. C'est la règle.

Pascal : D'accord. ... (同上:71)

(1)では、職場の先輩であるBenoitが新入社員(研修生)のLaurentに対して、「君も職場のメンバーだから今後は互いに“tu”で呼び合おう」と言い、(2)では、文化センターの所長であるM. Fernandezが、採用面接に来た青年のPascalに対して「ここでは“tu”で呼び合おう。それが決まりだ」と言っている。これらの例は、社会的な力関係、すなわち上下関係とは異なる視点から“tu”の使用が選択されることを示しており、これから一緒に仕事をしていく仲間として、信頼関係をもとに意思疎通をスムーズに行なっていくという意図が込められていると推察される。一方、映画「モンパルナスの灯(原題: MONT-PARNASSE19) - 1958年製作」には、恋人のジ

ャンヌ・エビュテルヌの住むアパートマンを訪ねて来た主人公のアメデオ・モディリアーニを、管理人の男性が

(3) Mais où allez-**vous**? Où allez-**vous**?
Descendez !

ととがめるシーンがある。この発話に対する字幕スーパーは

(3)' どこへ行く? 待て! 降りて来い!

であり、相手に対する警戒を含んだ場面における発話であるため日本語の「デス／マス」体は対応しえない。(3)の場合には、話し手と聞き手との間に社会的な上下関係が存在するとは考えにくく、あるのは心理的な距離のみである。

これに対し、

(4) P.D.G. : **Vous** avez vu ce chiffre?

Secrétaire : Oui, monsieur. (...) C'est un très beau chiffre d'affaires. (古石1999:50)

(4)' 社長: あの数字を見たかね。

秘書: はい。(...) 大変見事な売上高でございます。(同上:53)

の場合には、社会的上下関係のはっきりした社長と秘書の会話の一部である。(4)'の日本語表現においてはこの点が明確に反映されているのに対し、(4)では社長の方が“vous”を用いている。この場面における登場人物は社長と秘書の二人だけであるため、“vous”を用いることで、相手との立場の違いを反映した心理的な距離を置く効果が生じているとみるのが自然である⁹⁾。

さらに、NHK 2003年6月:10-11には、フラ

ンスへホームスティに行った日本の女子高校生ミオが、ホームスティ先の家族とともに祖父母の家に行って夕食をとる際に交わす以下のような会話がみられる。

(5) Thérèse : ... Ah, **vous** avez dix-sept ans.

Vous êtes donc lycéenne ?

(5)' テレーズ(祖母) : ... ああ、17 歳なんですか。じゃあ、高校生ね。

(6) Maurice : Mais où avez-**vous** appris le français ? **Vous** parlez très, très bien !

(6)' モーリス(祖父) : でも、どこでフランス語を習ったの。ほんとにすごくじょうずだ！

(5)、(6)では、年長者である Thérèse、Maurice が年少者であるミオに“vous”で話しかけている。初対面であるためミオとの間に心理的な距離を置いていることによると考えられるが、(5)に対しては(5)' のような「デス／マス」体の表現が、(6)に対しては(6)' のような「デアル／ダ」体の表現がそれぞれ対応している。

“vous”、“tu”の使い分けが主として親疎の度合いによることは、初級テキストに挙げられている典型的用例によってある程度理解できるものの、日本語の「君」、「あなた」のような二人称代名詞の使い分けとの相違や、「デス／マス」体、「デアル／ダ」体との対応については、学習の段階に合わせた継続的な解説が必要である。“vous”と“tu”の使い分けは、口頭でのコミュニケーションにおいて常に意識しなければならないことであり、フランス語話者が他者と

どのように心理的な距離をとりながら意思疎通を行なっているかの手がかりがそこから得られる。日本語話者の距離のとり方と比較した上での適切な教授法が求められよう。

3. 動詞

本章では、初級レベルで登場する動詞のうち、“regarder／voir”、“avoir”、“aller／venir”をとりあげる。いずれも具体的な動作を表わすため理解しやすいように思われるが、それぞれ、「見る／見える／会う」、「もっている／ある(いる)」、「行く／来る」との対応関係に注意しながら学んでいく必要がある。

3.1 “regarder”と“voir”

日本におけるフランス語学習者の多くは英語を学んだ経験があるため、“regarder”、“voir”の説明にあたっては、英語の“watch”、“look at”、“see”などの使い分けが参考とされることも多いと思われるが、日本語の「見る」、「見える」、「会う」と対照させて説明されることは少ないのではないか。テキストにとりあげられる表現例の中には、例えば

(7) Pépète, je **vois** quelqu'un dans le jardin.

(NHK 2003 年 7 月 : 20)

(7)' ペピート、庭に誰かが**見える**。(同上 : 21)

のように、“voir”に「見える」が対応しているものが少なくない。(7)は主体“je”が中心に置かれた動作表現(ドウスル表現)であるのに対し、(7)'は視覚でとらえられた対象「誰か」が中心に置かれた状況表現(ドウナル表現)であるという相違がみられ、コトガラのとらえ方が大きく異なっている。森田 1988 : 93、94 が述べているように、「見える」は意志性の有無にかかわりな

く対象がおのずと視野に入ってくる状態、すなわち状況(ドウナル)を表わす成分である。一方、日本語においては、有意志・無意志のいずれであるかにかかわらず、視覚による対象認知を動作として表わす場合には「見る」を用いることが可能であるため、以下のように“voir”に対して「見る」が対応するケースも存在する。

(8) J'ai **vu** cela de mes propres yeux.

(8)' それは私がこの目ではっきり**見た**ことだ。(『ディコ仏和辞典(“voir”の項)』)

“voir”と「見える」、「見る」のこのような対応関係については教育の場においてあまりふれられることはなく、“voir”に対して「見る」が対応するケースについて十分な説明がないということも少なくないのではないか。視覚による対象認知を表わす表現には、日仏両言語話者の発想の相違が鮮明にみてとれる(7)、(7)'のようなケースが存在するため、このような角度から説明がなされれば、コトガラに対する認識の仕方が言語によって異なることを学ぶよい機会となる。

“voir”とは異なり、“regarder”は意志性が明確であり、かつ一定方向に向けて視線を送る過程に比重の置かれた動詞であると考えられる。このことは、例えば

(9) **Regarde**, Pépite, ils sont beaux, ces perroquets ! (NHK 2003年9月:10)

(見て、ペピート、あのオウムきれいな！)

のような命令表現や、

(10) Annie, une collègue, est dans le couloir. Elle **regarde** dans le bureau de Benoît.

(REFLETS 1 : 30)

(同僚のアニーは廊下にいる。彼女は Benoît の部屋をのぞいている。)

のような、特定の空間に積極的に視線を向けようとする動作を表わす表現に用いられることによって明白である。細かく見ていけば、“regarder”と“voir”との間には、意志性の有無(もしくは強弱)、「視線を送る段階」と「対象を認知する段階」のいずれに比重を置くか、における相違が存在すると推測される。また、“regarder”の場合には、視線の方向が動作主体から対象に向かっているのに対し、“voir”の場合には、(7)のように対象が自然に目に入ってくることを表わすため“regarder”とは反対の方向性を有することとなるケースや、

(11) Vous passerez nous **voir** bientôt.

(NHK 2003年8月:37)

(11)' 近いうちに私たちに**会い**に寄ってください。(同上)

のように「会う」動作、すなわち当事者が共同で行なう、いわば双方向な動作を表わすケースが存在する。ちなみに、「会う」動作を表わす成分としては“voir”のほか、「互いに」を含意する“se voir”があり、

(12) On **se voit** de temps en temps.

(中村 2001 : 134)

(12)' 私たちはときどき**会っています**。

(同上)

のように用いられるため、「方向性」という視点から“voir”について考察する際には慎重さが求められる。しかし、“regarder”、“voir”の相

違に関する説明において「方向性」¹⁰⁾という視点を加えることは、両者の間に存在する本質的な相違に迫る上では有効であり、その必要性は学習者のレベルが高くなるにつれて増すと考えられる。このことは、“regarder”、“voir”と同じく感覚による認知を表わす“écouter”、“entendre”と「聞く」、「聞こえる」との間にみられる使い分けの相違についても同様にあてはまる¹¹⁾。

3.2 “avoir”と「もっている」、「ある／いる」

“avoir”は、「もっている」に対応する動詞として最初に紹介され、例えば

- (13) Il **a** une grosse voiture noire.
(500 語 : 127)
(13)’ 彼は大きな黒塗りの車を**持っている**。
(同上)

のような表現例を用いて解説されることが多い。しかし、泉 1989 : 57 が指摘するように、日本語では「ある／いる」を用いた存在表現によって表わされるコトガラが、フランス語では“avoir”表現によって表わされることが少なくなく、例えば

- (14) Il **a** une maison de campagne.
(中村 2001 : 56)
(14)’ 彼は田舎に別荘を**もっています**。
(14)” 彼には田舎の別荘が**あります**。(同上)
(15) Tu **as** du l’argent ?
(15)’ 君は**お金をもっている**か。
(15)” 君(に)は**お金がある**か。

のように「もっている」、「ある」の双方が対応

するケースや、

- (16) J’ai deux enfants. (500 語 : 24)
(16)’ 私には子供が**2人います**。(同上)

- (17) Je **n’ai** plus de clients.
(NHK 2003 年 6 月 : 37)
(17)’ もう**お客がいない**。(同上)

のように、「もっている」による表現が対応しないケースが存在する。日本語では「ある／いる」の発想により表現されるコトガラが、フランス語では「もっている」の発想により表現される¹²⁾点については、早い段階から学習者に対して注意をうながす必要がある。このことは例えば、パン屋に入った客が店員に対して

- (18) Vous **avez** des croissants ?
(川口ほか 2000 : 14)
(18)’ クロワッサンは**ありますか**。(同上)

とたずねる場合や、ホテルのカウンターで客が

- (19) Vous **avez** une chambre à deux lits ?
(500 語 : 43)
(19)’ ツインの部屋は**ありますか**？(同上)

とたずねる場合のように、日本語では「もっている」によっては表現されないケースが初級のフランス語表現にしばしば登場することによっても理解できよう。これらの表現例においては、“des croissants”、“une chambre à deux lits”が聞き手の側に属するものであると判断されたために“avoir”が用いられていると推測される。コトガラに関わる事物が聞き手の側に属するものとして表現されている例としては、聞き手が

発話時における所有者である(18)、(18)' および(19)、(19)' のようなケースのほか、例えばホームステイ先の家族が滞在者を部屋に案内する際の発話である

(20) Voilà votre chambre. Vous **avez** un lit, un bureau et une armoire.

(NHK 2003年4月:30)

(20)' ここがあなたの部屋です。ベッドと机、そしてタンスが**あります**。(同上:31)

のようなケースも存在する。(20)においては、話し手の所有物である部屋が、これから使うはずの聞き手(滞在者)の側に属するものとして表現されている。この点に関しては詳細な検討を経なければならないのはいうまでもないが、初級段階で必ずといってよいほど登場する(16)、(16)' や、

(21) Vous **avez** des frères et sœurs?

(NHK 2003年6月:10)

(21)' ごきょうだいは**いる**の。(同上:11)

(22) Non, non, je **n'ai pas** le temps.

(NHK 2003年6月:40)

(22)' ええ、時間**ない**から。(同上:41)

(23) Thérèse, j'**ai** quelque chose à te dire.

(NHK 2003年7月:50)

(23)' テレーズ、話**がある**んだ。(同上:51)

のような表現例をみても、日本語であれば「ある／いる」表現によって表わされるコトガラが、フランス語では主体と結びつけ“avoir”表現によって表わされるケースが珍しくなく、学習の初期段階ではこの点について説明が必要である

ことが理解できよう。

ところで、周知のように、「ある／いる」を表わす形式としては“il y a～(～がある／いる)”を最初に学習することとなるが、例えば

(24) J'**ai** un examen d'anglais demain.

(NHK 2003年6月:20)

(明日英語の試験があるから。)

(25) Elle est très gentille mais elle **a** un gros problème. (NHK 2003年6月:30)

(すごく親切な人なんだけど、大きな問題をかかえてるんだ。)

のような“avoir”表現と、

(26) Oui, **il y a** un test de niveau à neuf heures. (NHK 2003年5月:28)

(はい、9時にクラス分けのテストがあるんです。)

(27) Oui, mais **il y a** un petit problème.

(NHK 2003年7月:40)

(ええ、でもちょっと問題があるんです。)

のような“il y a～”表現がともに成立するケースが存在する。二つの表現形式の相違は、

(28) **Il fait** chaud/froid. (泉1989:59)

(29) Elle **a** chaud/froid. (同上)

の相違に通じていると考えられる。すなわち、泉1989:59が指摘するような、(28)は気候としての暑さ・寒さをいうのに対し、(29)は身体で感じる暑さ・寒さをいい、夏でも風邪をひけば

(30) J'ai froid. (同上)

が用いられるということは、コトガラに関わる事物が主体の側に属すると判断される場合には“avoir”表現が用いられるという前述したこととつながりがありそうだということである。

また、“avoir”表現は、例えば

(31) Cette salle a trois fenêtres.
(泉 1989 : 57)

のような、無情物について述べる場合に用いることが可能である点においても「もっている」とは異なり、「ある／いる」が対応する要因の一つとなっていると考えられる。

学習者が“avoir=もっている”、“il y a=ある／いる”の発想から抜け出せないでいる間は、客として店を訪れた際に(18)、(19)のような“avoir”表現よりは、

(32) Il y a du dessert, alors ?
(REFLETS 1 : 111)

のような“il y a”表現の方が先に思いうかぶことが多いと思われるため、“avoir”の用法に習熟することによってフランス語話者の発想による自然な表現を身につける必要がある。このことは、例えば

(33) Ils ont des jolies fleurs dans leur jardin. (500 語 : 32)

(33)' 彼らの庭にはきれいな花が咲いている。
(同上)

のような表現を使いこなすためにも必要である。

(33)' は「どこに何がある」と同様の語順をとっており、「ある／いる」の発想が背後にある。存在のありようは「咲いている」によって具体的に表わされているが、“avoir”表現との間に対応関係が成立する点においては

(34) Nous avons une grande table en bois dans le salon. (中村 2001 : 114)

(34)' 居間に大きな木製のテーブルがあります。(同上)

の場合と同様である。

3.3 “aller” と “venir”

“aller”は「行く」に、“venir”は「来る」に対応する動詞として紹介されるのが一般的であるが、英語の“come”と同様に、「行く」に対して“venir”が対応するケースが存在し、テキストや参考書においてもしばしばとりあげられる。例えば、「後日食事に行く」という約束を交わしている場面において話し手の一人が「私も行きます」という場合は“Je viens.”が用いられる。同様の例としては

(35) Maya : ...Je vais à la banque. Je n'ai plus d'argent français.

Toi, tu restes à l'hôtel.

Pépité : Oh, non, je viens avec toi.

(古石 1999 : 30)

(35)' マヤ：…銀行に行くの。もうフランスのお金がないから。あなたはホテルにいなさい。

ペピート：いやだ、いっしょに行く。

(同上 : 33)

(36) Yoko : Alors, notre rendez-vous, c'est
demain à dix heures devant la
poste, n'est-ce pas ?

Marion : Euh, c'est-à-dire que je ne
peux pas **venir**. Car demain, je
pars pour faire du ski avec
Jacques.

(藤田・清藤 2002 : 150)

(36)' 洋子 : じゃあ、明日 10 時に郵便局の前
で待ち合わせね。

マリオン : あのう、実は行けなくなっ
たの。明日ジャックとスキ
ーに行くことにしたから。

(同上)

が挙げられる。(35)においては、マヤが銀行に
(一人で)向かうことを言うのには“aller”が、
ペピートが聞き手であるマヤについて行くこと
を言うのには“venir”が用いられている。また、
(36)においては、明日の約束の場にいるはずの
Yoko(聞き手)に向かって「行けない」と言うの
には“venir”が用いられている。“venir”に「行
く」が対応するのは、久松 1999 : 37、藤田・清
藤 2002 : 151、加藤 2002 : 68-69、安生 1990 :
17-23 に述べられているように、“venir”が「来
る」とは異なって、聞き手に向かって移動する
場合や、聞き手と一緒に移動する場合に用いる
ことが可能なためと考えられる。学習者が
“aller”、“venir”の誤用を避けるためには、
このような発想レベルの相違に習熟することが
求められる。ちなみに、聞き手に向かっての移
動に「来る」動作を表わす動詞を用いる現象は
英語やフランス語のほか、中国語にもみられる。
日本語の「行く」、「来る」との相違という観点
から移動動作を表わす外国語の動詞をみていく

ことは、日本語話者に対する外国語教育、およ
びその基盤となる対照研究における重要なテー
マである¹³⁾。

ところで、久松 1999 : 37 に述べられているよ
うに、“venir”は、“venir+不定詞”形式で

(37) Il **vient** aider son frère chaque matin.

のような「～しに来る」を表わす働きを、“venir
de+不定詞”形式で

(38) Nous **venons d'**arriver à Haneda.

のような「～したばかりだ」を表わす働きを有
する。いわゆる近接過去形“venir de+不定詞”
が有するこのような働きについては、例えば

(39) Je **vais** faire du tennis dimanche pr-
ochain. (NHK 2003 年 8 月 : 18)

(39)' 今度の日曜日にテニスをします。(同上)

のようないわゆる近接未来形“aller+不定詞”
で「～する(つもりだ)」を表わす用法とともに、
「動作・行為を時間の流れの中でどのように位
置づけるか」という観点から説明がなされる必
要がある。“aller+不定詞”の説明は、例えば

(40) Je **fais** du tennis dimanche prochain.
(同上)

のようないわゆる現在形で未来の動作を表わす
用法や、

(41) Je **ferai** du tennis dimanche prochain.
(同上)

におけるようないわゆる単純未来形などと比較して行なわれることが多いが、“venir de+不定詞”と比較しながら解説を行なうことにより、空間移動を表わす動詞が時間的な概念を表わす働きを備えるにいたった¹⁴⁾過程を学習者に理解させることが可能となる。このことは、移動動詞である“aller”、“venir”がなぜ“aller+不定詞”、“venir de+不定詞”のような「近接未来/過去」の用法を構成するのかという、学習者の素朴な疑問に答えることでもある。NHK2003年5月：28-29, 35に記載されているように、“aller+不定詞”を用いた表現の中には、例えば

(42) Et ce soir, mes enfants, nous **allons** dîner chez mes parents.

(NHK 2003年5月：28)

(42)’ 今晚はね、両親のところにご飯食べに
行きますからね。(同上：29)

のような、“aller+不定詞”が「～しに行く」、近接未来のいずれを表わしているかの判別が困難なものがある¹⁵⁾。このような表現例における“aller”は、移動動作を表わすと同時に近接未来を表わす働きをも帯びているということができ、空間表現と時間表現との連続性について知る手がかりとなる。

4. “être en train de+不定詞”

周知のように、進行中の動作は英語では

(43) What **is** she **doing** upstairs?

(久松 2002：20)

のように“be+～ing”によって表わされるが、フランス語では

(43)’ Qu’est-ce qu’elle **fait** en haut?

(同上)

や、あるいは

(44) Les oiseaux **volent** dans le ciel.

(青木 2002：74)

(鳥たちが空を飛んでいる。)

のように、いわゆる動詞の現在形によって表わすことが可能である。進行中の動作を表わす方法としては動詞の現在形のほか、“être en train de+不定詞”形式が存在する。青木 1987：20の記述にみられるように、前者は未来時の事柄、近接過去の事柄を表わすことも可能であるのに対し、後者は進行中の動作を表わす働きに限定される。テキストにおいては、“être en train de+不定詞”を用いた表現に対して「**Vテイル**」を用いた日本語表現を対応させるケースが多いが、

(45) Sandrine **est en train de** ranger la vaisselle sur l’étagère dans la cuisine. (中村 2001：110)

(45)’ サンドリーヌは食器類を台所の棚に片付け**テイルトコロデス**。(同上：111)

のように「**Vテイルトコロダ**」の表現を対応させているケースもみられる。“être en train de+不定詞”の働きについて、藤田・清藤 2002：87は、動作が進行中であることを強調したい時に用いられるとしている。このことは換言すれば、発話時において確実に動作が行なわれていることを伝える場合には“être en train de+不定詞”が用いられるということであると考えられる。例えば、同：86に掲載されている

(46) Jacques : Allô ! Yoko ? Bonjour ! Pourrais-je parler à Marion, s'il te plaît ?

Yoko : Ah, elle **est en train de** prendre sa douche.

においては、Marion と話したいと言っている電話の相手に対して「彼女は今まさにシャワーを浴びている」ことを伝えている¹⁶⁾。一方、

(46)' Jacques : Allô ! Yoko ? Bonjour ! Pourrais-je parler à Marion, s'il te plaît ?

Yoko : Ah, elle **prend** sa douche.

の場合には、(46)と同様のコトガラを表わすことができるほか、シャワーを浴びる行為そのものではなく、シャワーを浴びるために衣服を脱いでいたり、あるいはシャワーを浴び終わって衣服を着たり髪を乾かししたりしている場合に用いることも可能である。藤田・清藤 2002 は(46)に対して

(46)" ジャック : もしもし、洋子 ? マリオンと話したいんだけど。

洋子 : 彼女、今シャワーを浴び**テ(イ)ル**の。

という日本語表現を対応させているものの、「être en train de+不定詞」の上記の特徴が日本語表現に厳密に反映されているわけではない。

進行中の動作を表わす現在形、「être en train de+不定詞」の相違については、テキストで説明されることが少ないようである。いかなる場合にいずれの形式が選択されるかについて解説

を加えることは、日本語の「**Vテイル**」、「**Vテイルトコロダ**」の使い分けとも関わり、極めて重要である。「テイル」は動詞に付加されて「動作の進行」、「動作の結果状態」のいずれを表わすことも可能であるのに対し、「**テイルトコロダ**」は「動作の進行」を表わす働きに限定されている¹⁷⁾ため、(45)、(45)' のような対応関係には一定の合理性が認められよう。しかし、「**Vテイル**」の発想に引きずられることによって生じる“être en train de+不定詞”表現の誤用を避けるためにも、フランス語の現在形による進行表現、“être en train de+不定詞”表現、日本語の「**Vテイル**」、「**Vテイルトコロダ**」表現を視野に入れた体系的な説明が必要である。

「**テイルトコロダ**」は「**テイル最中ダ**」に置き換えられるため、「**トコロ**」の概念は空間的なものから時間的なものに変化しており、発話時において動作が位置する段階(=進行中の段階)を表わしているといえることができる¹⁸⁾。すなわち、空間表現を時間表現に転用した結果として生じた用法であるが、このことは“être en train de+不定詞”についてもあてはまると推測される¹⁹⁾。その根拠の一つは“en”の働きにある。“en”の働きが空間の限定から時間の限定に広がっていったであろうことは、『ディコ仏和辞典(“en”の項)』が“en”の働きとして場所を示すことのほか、例えば

(47) Mon père est **en** voyage d'affaires.

(父は出張中です)

のような様態(～(の)状態)に「**で**」を表わすことを挙げている点や、川口ほか 2000:63 が“en”の働きの一つとして「～の最中です」という状態を表わすことを挙げ、

(48) Je suis **en** vacances. (私は休暇中です)

を例としている点によっても理解できよう。
“être en train de+不定詞”の説明にあたっ
てはさらに、“train”が有する語彙的意味につ
いてもふれる必要があり、これらの点にふれな
がら、この形式がいかなる発想にもとづいて成
立しているかを学習者に理解させる必要がある。

また、“être en train de+不定詞”の学習に
あたっては、動詞の現在形(いわゆる「直説法現
在形」)を用いた進行表現との相違について理解
することも必要である。青木 1987 : 26 は、

(49) Ne le dérange pas. Il **travaille**.

(49)' Ne le dérange pas. Il **est en train**
de travailler.

のように動詞の現在形と“être en train de+
不定詞”が競合するのは、いわゆる継続相の動
詞が述語となっているためであるとし、同 : 23
には、

(50) Pierre **travaille** en ce moment dans son
bureau.

における“travailler”は話者の確認(断定)の
事柄として扱われている、すなわち“travailler
dans son bureau”が“ne pas travailler dans
son bureau”あるいは“faire d'autres choses
que 《travailler》”の価値から区別され、確か
なものとしてとらえられていることを表わすほ
か、発話時点に定着される一つの occurrence
を問題としているという記述がみられる。この
ことは換言すれば、現在形を用いて進行中の動
作を表わす用法は、継続可能な動作動詞を用い
た表現において、動作が発話時に進行中である

ことを話者が認めることによって成立するとい
うことであり²⁰⁾、進行中であることが形式的に
明示されている“être en train de+不定詞”
とは異なる。

進行表現の理解のためにはこのほか、例えば

(51) Il **était en train de** chanter.

(青木 1987 : 25)

(51)' Il **chantait**.

の間にみられる相違、すなわち過去の特定の時
点においてまさに歌っている最中であつたこと
を表わす(51)と、必ずしもそうではないことを
含意する(51)'との相違や、

(52) Cette ville est en danger : elle **est**
en train de mourir. (古石 1999 : 86)

(52)' この町は危険にさらされています。死
に**カカッテイル**のです。(同上 : 89)

のように、過程よりは結果が問題となる動作動
詞を用いた表現についての解説も加える必要が
ある。(52)に対しては「**Vテイル**」表現が対応
しないため、“être en train de+不定詞”によ
って表わされる「進行」とはいかなる概念であ
るかということをも含めた詳細な考察が求めら
れよう。

5. おわりに

以上、フランス語の語彙・文法現象の中から、
日本語話者にとって重要でありながらも、従来
は教育の場において正面からとり上げられるこ
との少なかったものについて述べた。いずれも
学習者にとっては「かくれたポイント」ともい
うべきものであり、フランス語の自然な表現を
身につけるために不可欠であると同時に、フラ

ンス語話者が客観世界をどのようにとらえているかを知り、その発想を理解してよりよいコミュニケーションを行なえるようにするために有効なものである。これらによって、日本語話者に対するフランス語教育や日仏対照研究、ひいては異文化教育にいささかなりともヒントを与えることができれば幸いである。

注

- 1) この点については成戸 2002:114-116 を参照。
- 2) 成戸 2008、同 2010 はこれらの内容をまとめたものである。
- 3) 「エビ」、「マメ」、「ウシ」のケースとは反対に、日本語で「蝶、蛾」のように区別されるものがフランス語では“papillon”で表わされる。鈴木 1990 : 49-55 を参照。
- 4) “la langue de bœuf au vin rouge(牛タンの赤ワイン煮)”、“le rôti d’agneau(子羊のロースト)”など、料理名の中には動物の名前が多く登場する。
- 5) 篠沢・マレ 2003 : 189 によれば、“riz”は大量の湯に入れた後、しずくを切ってバターと塩を加えチーズをまぶすなど、麺の調理法と同様になされることがある。
- 6) 《REFLETS 1 CAHIER D’EXERCICES》: 56 には、料理を“Entrée(アントレ:スープまたは前菜と肉料理の間に出るもの)”、“Plat principal(メインディッシュ)”、“Légume(野菜)”、“Fromage(チーズ)”、“Dessert(デザート)”に分類する練習問題が設けられている。
- 7) 「椅子ニすわる」における「ニ」は動作・行為の間接的な対象(動作によって主体がくつつく先としての非トコロ)を示している。成戸 2009 : 71-72 を参照。
- 8) 藤田・清藤 2002 : 33 は、“vous”は初対面の時や目上の人など、日本語であれば「デスマス」調で話す間柄で、“tu”は家族や子供、友人など親しい者どうしで用いるとしながらも、どれぐらいの親しさであれば“tu”を用いるかはフランス語話者どうしても微妙なケースがあるとしている。
- 9) 泉 1989 : 133-135 には、話者が相手との間に(心理的な)距離を置こうとする場合に“vous”を用いる例が紹介されている。
- 10) ここでいう「方向性」とは「空間的方向性」を指す。筆者はかつて、視覚動作を表わす中国語表現に関する考察(成戸 2006、同 2007)において、「空間的方向性」とならんで「時間的方向性」、「心理的方向性」という概念をもうけた。
- 11) この点については泉 1978 : 70-72 を参照。
- 12) 同様のことは、“Do you have a table for three people? / 3 人分のテーブルはありますか。(久松 1999 : 56)”のような“have”を用いた英語表現についてもあてはまる。
- 13) 移動動詞をめぐる日本語と外国語の対照研究について論じたものに、荒川 1996 がある。同 : 170-171 には「いく」、「くる」と中国語の“去”、“来”との相違についての記述がみられる。
- 14) この点については、“aller+不定詞”について考察した南館 1998 : 22、“venir de+不定詞”について考察した加藤 2002 : 61 を参照。
- 15) 同様の例は、加藤 2002 : 78-79 にもみられる。久松 1999 : 33 には、「～しに行く」を表わす例として“Je vais faire mes achats dans le grand magasin.”が、近接未来表現の例として“Nous allons jouer au tennis cet après-midi.”が挙げられているものの、判別の基準は示されていない。
- 16) “être en train de+不定詞”表現は、例

えばドラマの台本において登場人物が特定場面で行なっている動作を説明するト書の部分にもしばしば用いられるようである。

- 17) この点については小熊 1993: 142、成戸 2009: 309-310 を参照。なお、小熊 1993: 140 には、「**Vテイルトコロダ**」も“être en train de+不定詞”と同様に「強調」のニュアンスを有する旨の記述がみられる。
- 18) 「**テイルトコロダ**」が空間表現から転用された形式である点については、成戸 2009: 309-310 を参照。
- 19) コムリー 1988: 159、161、162 は、ありかを表わす成分が進行を表わす働きを備えるにいたった例として、英語の“to be in the process of doing something”、“to be in progress”、イタリア語の“stare(立っている)”を用いた進行表現、“在(〜にある)”を用いた中国語の進行表現を挙げている。
- 20) 青木 1989: 307-308 には、発話時において話し手が事態の成立を確認する時に、“travailler”のような継続動詞は現在進行形の解釈を受ける旨の記述がみられる。同様の現象は中国語にもみられ、“在V”のような形式を用いないで進行中の動作を表わすことが可能である。この場合、発話時であることを明示するいわゆる語気助詞の“呢”が用いられることが多い。この点については成戸 2009: 303-304 を参照。

参考文献

- ・青木三郎 1987. 「現代仏語のアスペクト・テンス・モダリティー—être en train de+infinitif と現在形について—」, 日本フランス語学研究会『フランス語学研究』第 21 号, 20-35 頁。
- ・青木三郎 1989. 「文法の対照的研究—フランス語と日本語—」, 山口佳紀編集『講座 日本語と日本語教育 第 5 巻 日本語の文法・文体 (下)』, 明治書院, 290-311 頁。
- ・青木三郎 2002. 「フランス語と日本語との空間表現の対照—中と dans について—」, 『日本語学』2002 年 7 月号 (VOL. 21), 明治書院, 74-83 頁。
- ・荒川清秀 1996. 「日本語学と対照言語学 中国語との対照」, 『日本語学』1996 年 7 月臨時増刊号 (VOL. 15), 明治書院, 168-174 頁。
- ・安生恭子 1990. 「ALLER と VENIR の意味構造—VENIR の拡大的用法を中心として—」, 日本フランス語学会『フランス語学研究』第 24 号, 14-27 頁。
- ・泉邦寿 1978. 『フランス語を考える 20 章 意味の世界』, 白水社。
- ・泉邦寿 1989. 『フランス語、意味の散策 日・仏表現の比較』, 大修館書店。
- ・『NHKラジオ フランス語講座』2003 年 4/5/6/7/8/9 月号, 日本放送出版協会。(略称 NHK)
- ・小熊和郎 1993. 「トコロダと aller, venir de, être en train de+infinitif—アスペクトとモダリティーの関連を巡って—」, 『西南学院大学フランス語フランス文学論集』第 29 号, 139-175 頁。
- ・加藤千尋 2002. 「フランス語の venir de+inf. について」, 東京大学言語情報科学研究会『言語情報科学研究』第 7 号, 61-80 頁。
- ・川口裕司/川口恵子/クリスティアン・ブレイエ 2000. 『ゼロから話せるフランス語』, 三修社。
- ・古石篤子 1999. 『金色の眼の猫 絵本編』, 駿河台出版社。
- ・(財)フランス語教育振興協会編『CD・イラストで覚える フランス語基本 500 語』, 朝日出版社(1998)。(略称 500 語)

- ・篠沢秀夫／ティエリー・マレ 2003.『フランス語の常識 日常表現は文化の鏡』,白水社。
- ・鈴木孝夫 1990.『日本語と外国語』,岩波新書。
- ・田桐正彦編『ポケットプログレッシブ 仏和・和仏辞典』,小学館(第3版 2006)。
- ・中條屋進・丸山義博・G.メランベルジュ・吉川一義編集『ディコ仏和辞典』,白水社(2003)。
- ・中村敦子 2001.『音読仏単語① 日常生活編』,第三書房。
- ・成戸浩嗣 2002.「ことばと社会」,愛知学泉大学コミュニティ政策学部編『コミュニティ政策を学ぶ』,愛知学泉大学出版会,113-119頁。
- ・成戸浩嗣 2006.『「看到」,『见到』の使い分け(その2)」,愛知学泉大学コミュニティ政策学部『コミュニティ政策学部紀要』第9号,87-99頁。
- ・成戸浩嗣 2007.「“看到+ヒト”と“见到+ヒト”」,愛知学泉大学コミュニティ政策研究所『コミュニティ政策研究』第9号,41-54頁。
- ・成戸浩嗣 2008.「コミュニティ政策学部における異文化教育の試み」,愛知学泉大学コミュニティ政策研究所『コミュニティ政策研究』第10号,91-105頁。
- ・成戸浩嗣 2009.『トコロ(空間)表現をめぐる日中対照研究』,好文出版。
- ・成戸浩嗣 2010.「コミュニティ政策学部における異文化教育の試み(2)―中国と日本―」,愛知学泉大学コミュニティ政策研究所『コミュニティ政策研究』第12号,111-126頁。
- ・バーナード・コムリー著／山田小枝訳 1988.『アスペクト』,むぎ書房。
- ・久松健一 1999.『英語がわかればフランス語はできる!』,駿河台出版社。
- ・久松健一 2002.『英仏日CD付 これは似ている! 英仏基本講文 100+95』,駿河台出版社。
- ・藤田裕二／清藤多加子 2002.『英語もフランス語も 比較で学ぶ会話と文法』,評論社。
- ・南館英孝 1998.「Aller+inf.と単純未来―その棲み分けと競合―」,東京外国語大学グループ《セメイオン》『フランス語を探る フランス語学の諸問題Ⅱ』,三修社,22-33頁。
- ・森田良行 1988.『日本語の類意表現』,創拓社。
- ・Guy Capelle, Noëlle Gidon(1999):《REFLETS 1》,Hachette-Livre.
- ・Guy Capelle, Noëlle Gidon(1999):《REFLETS 1 CAHIER D' EXERCICES》,Hachette-Livre.

(2010. 12. 9)